企業探訪

一枚の生地から、無限の形を創り出す

株式会社南海プリーツ

代表取締役 吉波 剛 氏

茨城県牛久市に本社を構える株式会社南海プリーツは、婦人服や子ども服、学生服のほか、救急車の窓につけるカーテンなどインテリアも含めたプリーツ加工を得意とする企業です。

パリコレ出展ブランドからも熱い信頼を受け、コレクションの製作サポートをしています。また、G7伊勢志摩サミットで使用されたVIP車両の窓カーテンの製作、歌手の舞台美術装飾品の提供など、幅広い分野から同社のプリーツ加工技術に注目が集まっています。

今後は世界一と称される日本の高いプリーツ加工技術を海外市場へ積極的にアピールしたいと語る同社3代目の社長、吉波剛氏の熱い想いをお聞かせいただきました。

インタビュー日：2018年9月12日

〔聞き手：筑波総研㈱ 専務取締役 藤咲耕一〕

〔文・写真：筑波総研㈱ 研究員 冨山かなえ〕

企業概要

本　　社：茨城県牛久市小坂町2472

創　　業：1968年（昭和43年）

設　　立：1970年（昭和45年）4月

従 業 員：30名

事業内容：婦人服、子ども服、学生服、車両の窓カーテンなどインテリアのプリーツ加工

吉波社長が事業に携わるまでのご略歴などについてお聞かせください。

幼い頃から家業を継ぐことを意識

牛久市で生まれ育った私は、地元の小・中学校、常総学院高等学校を卒業後、アメリカ、マサチューセッツ州内の大学に進学しました。

実家は、父、南海雄（現顧問）と父の弟で叔父の忍（現会長）が、東京のプリーツ加工工場で修行を積んだ後、1968年（昭和43年）に2人で立ち上げたプリーツ加工会社でした。

私は、幼少の頃から工場で様々な種類の生地に触れながら、父たちの背中を見て育ちました。私は、「将来、自分もこの会社の経営に携わるだろう」と心の中で意識していたこともあり、大学では経営学を専攻しました。

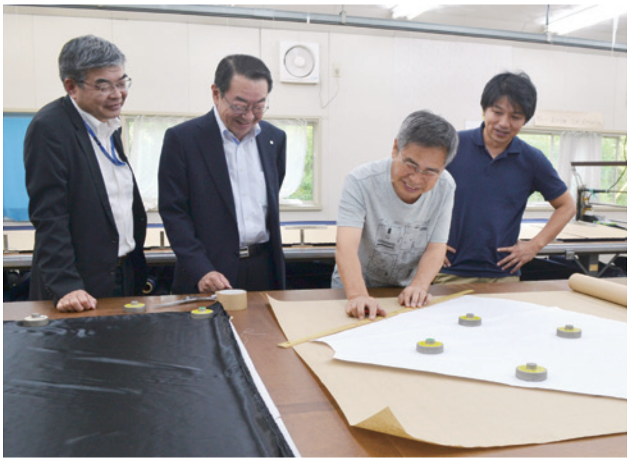
「“当たり前のレベル”が極めて高い」

帰国後、私は、東京に本社を構える繊維専門商社に入社しました。同社では、国内外の糸や生地をはじめ、様々な衣料製品、製造工場など、繊維に関する幅広い知識を習得しました。

2007年（平成19年）、2代目の叔父から「牛久に戻り、一緒に会社を盛り上げてほしい」と声を掛けられたのを機に、30歳で当社に入社しました。

入社直後、私は「商社時代にも様々な工場を見てきたが、南海プリーツは“当たり前のレベル”が極めて高い」と感じ、この文化を作り上げてきた父たちに大きな敬意を払いました。

そして、今、私は3代目として、これまで当社が培ってきた技術力をさらに進化させていきたいと考えています。



父（現顧問、中央右）の背中を見て育った社長（右）

御社の事業概要とプリーツ加工技術の特徴などについてお聞かせください。

パリコレ出展ブランドからも厚い信頼

当社は、婦人服や子ども服、学生服をはじめ、救急車の窓につけるカーテンなどインテリアのプリーツ加工を得意としています。

売上全体の7割は、婦人服が占めています。お客さまは、大手アパレル、商社、百貨店のほか、独創的な世界観を発信し続けるCOMME des GARÇONS（コムデギャルソン）や芦田淳氏などファッションデザイナーの方々です。

当社は、コムデギャルソンがパリコレに出展するコレクションの製作サポートをはじめ、G7伊勢志摩サミットで使用されたVIP車両の窓カーテンの製作、歌手のきゃりーぱみゅぱみゅさんの舞台美術装飾品の提供なども行っています。

このように、当社のプリーツ加工技術は、ファッション業界に留まらず、国内外の様々な業界から大きな注目を浴びています。

様々な模様のプリーツ加工

一枚の生地から、無限の形を創り出す

プリーツ加工は、最初にデザインをCADデータに変換し、専用マシーンで折り目を付けた厚紙（カルトン）を丁寧に手で折っていきます。

次に、折り目を付けた2枚の型紙に加工する生地を挟み、100度前後の蒸気を繰り返し排出する特殊なスチーム釜で、30分ほど熱を加えます。

生地を挟む厚紙は蒸気を通しやすいため、ポリエステル系の生地にしっかりと熱が伝わり、生地が持つ熱可塑性を利用して、布に折り目を形状記憶させていきます。

厚紙で作られた型紙を説明する吉波社長（右）

依頼は全て「YES」。高い対応能力が自慢

型紙は全て当社のオリジナルで、サンプルも合わせると2,000種類に上ります。デザインを考える際、「折り紙」を参考にすることが多く、社内には何冊もの折り紙の本を揃えています。

当社の一番の強みは、どのような難しい依頼も全て「YES」と答えられる高い技術力です。既存のサンプルを進化させたり、新しい要素を加えることで、常に新しいデザインを生み出しています。

お客さまの想いを形にするハンドプリーツ

プリーツ加工は、「ハンドプリーツ」と「マシンプリーツ」の２種類があります。マシンプリーツは、細かい折り目から大きなものまで、様々な種類を大量に生産することが可能です。

一方、ハンドプリーツは、機械では表現しきれない複雑で繊細なオリジナルの折り目を手作業で丁寧に作り出す技術です。

例えば、「ほんの少し柔らかい感じにしてほしい」、「微妙な曲線をつけてほしい」など、図面には描き切れない絶妙なニュアンスは、長年経験を積んだ職人の技術だけが表現することができます。

型紙に生地を合わせる職人

御社の高いプリーツ加工技術を活かした商品「Peti Peto（プッチペット）」についてお聞かせください。

南海プリーツと「どうしても実現させたい」

当社は2015年（平成27年）、メガネやスマートフォンの汚れを拭くクリーニングクロス「Peti Peto（プッチペット）」（右図）を製作しました。

製品の企画者は、世界各地の素材や技術を駆使して様々なプロダクトをデザインする株式会社100percent（本社：東京都品川区）代表取締役の坪井信邦氏です。「南海プリーツの技術で、どうしてもこの企画を実現させたい」という熱い想いに、当社も全力で応えていきました。

「Peti Peto」は、ハンドプリーツで100％ポリエステルの柔らかい布を鶴や富士山、ペンギンなどの形に加工します。メガネなどを拭く際は布を広げて使用し、後は手の上でぽんぽんと跳ねさせるだけで、もとの形に戻すことができます。

鶴の形をした「Peti Peto」をぽんぽんと跳ねさせるだけで、元通り

日本らしいアイテムで外国人の心を掴む

当社は、「Peti Peto」を製作する前から、名刺の代わりに、プリーツ加工した鶴を作っていました。このアイディアと技術が商品化に結びついたことは、とても嬉しく感じています。

「Peti Peto」は「小さな動物」という意味で、遊び心満載の商品です。また、外国人の方に対し、折り紙などの日本文化や高い技術力を伝えるアイテムとして、大変ご好評をいただいています。

吉波社長が考える理想の会社像や社員への想いについてお聞かせください。

なごやかで明るい雰囲気が会社全体を包む

当社に在籍する従業員は30名で、そのうち25名がプリーツ加工職人です。従業員の多くは女性で、先代の時代から続けて働いている方もいます。

工場内はとても明るい雰囲気で、女性たちの明るい笑い声が聞こえてきます。この柔らかい社風は、顧問や会長が作り上げてきました。

年間で最低1名は採用していますが、よほどの理由がない限り、退職を希望する人はいません。これは、社内での居心地が良いからだと思います。

私は3代目として、「これからも、社員から愛されているこの会社を長く存続させなければならない」という強い信念と覚悟を持っています。

会社は、従業員とその家族を守る義務があります。従業員と仕事の喜びを分かち合い、お互いを高め合いながら、強く前向きな気持ちで会社を永続的に発展させていきたいと考えています。

事業戦略の鍵となるものをお聞かせください。

AI時代と逆行、手間隙かけた手作業で勝負

これから、AIやIoTを活用し、業務の効率化を図ることが当たり前となる時代を迎えます。しかし、当社はAI時代に逆行し、人間のセンスと技術力を活かした「ハンドプリーツ」で勝負していきたいと考えています。

マシンプリーツは、熟練の職人が折り目幅などを設定することで、どんなに細かい折り目も同じように仕上げることができます。

一方、ハンドプリーツは、マシンプリーツでは表現しきれない、繊細な加工が可能です。この技術を高めることでお客さまの心を掴んでいきたいと考えています。これこそ、「モノづくりの醍醐味」です。

当社にしかできない加工技術を求め、日々、多くのお客さまが熱い想いを胸に秘めながら、当社に足を運んでいただいています。

当社はこの想いに応えるため、他社の一歩、二歩先を走り続けたいと考えています。そのためにも、全員が常に好奇心を忘れず、豊かな発想を持ち続けながら、技術を磨き続けて参ります。

ハンドプリーツの魅力を語る吉波社長（右）

今後の事業展開や目指す方向性をお聞かせください。

世界トップレベルの技術で世界進出

プリーツ加工の歴史は古く、古代エジプト時代では王や王妃の衣服に用いられ、中世ヨーロッパでは身分の高い裕福な人々の間で流行しました。現在はプリーツ加工技術も発達し、世界各国のファッションに取り入れられています。

しかし、今では海外においてプリーツ加工を行う企業は少なくなってきており、日本の技術力は「世界トップレベル」といえます。

今後は商社などと連携し、当社の高いプリーツ加工技術を海外市場へ積極的にアピールしていきたいと考えています。今後も、従業員と大きな夢を共有しながら、日々、チャレンジ精神で事業を進めて参ります。

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

吉波社長（中央）、牛久東支店 鈴木支店長（右）と
聞き手・藤咲耕一